王宮で農業生活を送る花嫁

佐倉風弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
王宮で農業生活を送る花嫁

【Ｎコード】
Ｎ６９５０Ｚ

【作者名】
佐倉風弦

【あらすじ】
「嫁に来ないか？」
農家の娘であるチャウランはある日、皇子に出くわし、チャウランの野菜を食べた彼はそう言ってきた。
「あなたが皇子様と結婚すればお母さん達はお金がたくさんもらえ……きっとあなたは幸せになれるわ」
母と父にお金たくさんもらえる攻撃を受け、送り出されたチャウランは王宮で農業生活をすることに。
皇子の嫁として、はたまた農民として奮闘する。

野菜が一個

帝都から離れた辺境の地だった。
広大な空では青と白のグラデーションが繰り広げられており、その下には一面に緑色が目立つ畑の中央に土で作られた道。
大きな籠に大量のポココと呼ばれる紫色の丸い野菜を詰めてよろよろと運ぶ少女の姿があった。
彼女は黄金色の髪を後ろで束ね、動きやすい白い服と黒いズボン、手には手袋を嵌めている。
重い籠を抱えた彼女は、後ろからカラカラという音を聞き取り、振り向いた。
この地には滅多に来ることのない馬車だった。
豪勢なデザインの黒い馬車であった。馬車には、この国――秀華（しゅうか）帝国の紋章が掘られていた。

それに気づいた少女は慌てて道を開ける。
帝国の紋章が掘られた馬車。それは、王宮の馬車だった。
この馬車が使われるのは王族が移動をする時だけである。
少女の道の端で馬車が通り過ぎるのを待った。
馬車は少女を通り越し、少し先で止まった。

少女は何事かと馬車に目を凝らした。
馬車が動かなくなったのかもしれないし、気になるものを見つけたのかもしれない。
少し時間が立つと中から数人の兵士が出てきて、その後に一人の青年が出て来た。
雪のような白銀の髪に紅蓮の瞳。金の装飾が施された青い服。
その姿を知らないはずはなかった。
何せ、彼はこの国の皇子だったのだから。

てっきり皇帝が乗っているものだと思っていた彼女は驚くしかなかった。
いや、皇帝も乗っているのかもしれないが。
皇子はこちらに目を向け、歩み寄って来る。
彼女は籠を持って後ずさる。
「君だ、そこの……籠を持ってる」
〈……もしかして、私何かしたかな？　牢屋行き？　死刑？〉
冷や汗をダラダラ流す少女の様子に気づいたのか王子は再度口を開いた。
「何か勘違いしてるようだが――俺がほしいのはその君の持ってる籠のなかの」
少女は籠のなかを確かめた。
籠に入っているのはポココだけである。
あえて説明するなら、このポココは少女が育てて不恰好ながらも何とか食べられる程度には育ったものである。
これ以外には何も入っていない。
少女は目を丸くしてポココと皇子を見比べ、恐る恐る口を開く。
「これですか……？」
「ん、その通り」
「ホントに……？」
黙って頷く皇子にポココを一つ、差し出した。
ポココを受け取った王子はポココにかじりついた。

もぐもぐと口を動かし、ごくんと飲み込んだ。

〈生で食べちゃダメなのに……。ちゃんと加熱しないと腹壊しますよ？〉

口には出せなかった。

「シャキシャキするな」

〈加熱してないんだから当たり前だろボケ〉

「しかし、うまい」

「これがですか……？」

〈何ですかこの皇子。すごくいい人じゃないですか〉

「これで収入はどれぐらいだ？　満足に作れるぐらいの金はあるか？」

「あ、いや……収入もお金もあんまり……」

何が何だか分からないまま答えた。

「ところで、君の名前を聞こうか。俺は、知ってるとは思うが、シーゼン」

「私ですか。私は、チャウランです」

名前を聞かれたということは、もしかしたら野菜をまとめて買い取ってくれるのではないかとチャウランは期待に胸をふくらませた。

シーゼンはチャウランから籠を受け取り、兵士に渡して馬車のなかに運ばせると彼女に向き直り、にっこりと笑顔を浮かべて次の言

葉を発した。

「では、嫁に来ないか？」

「はい、分かりましたー……え？」

チャウランは目を丸くした。

◆

家に帰ったチャウランは母と父と木製のテーブルを囲んで話し合いをしていた。

母と父はにこにこしていてやけに上機嫌だった。

チャウランは困ったような表情を浮かべていた。

「良かったじゃない。相手が皇子様なら玉の輿じゃない」

母の言い分に対してチャウランは難しい顔をした。

「私はまだ、十六歳だし……」

「結婚は十六歳からできるんだぞ」

父親の言葉にうっと言葉を詰まらせる。

どうにか回避しようとチャウランは何らかの言い訳を探すべく思

考を巡らせる。
そして次の攻撃。
「そもそも、今日初めて話した相手で愛なんて」
「結婚してからでも遅くはないさ」
父の遅くはない反撃。
チャウランは五十のダメージを受けた。残り精神ポイント五十。
「チャウラン」
母がお茶をするのをやめ、チャウランに言葉をかける。
笑顔で弾んだ声を発する。
「あなたが皇子様と結婚したらお母さん達はお金がたくさんもらえ……王子様と結婚したらあなたは幸せになれるわ」
「うぐ……」
母親のお金がたくさんもらえる攻撃。
チャウランは五十のダメージを受けた。残り精神ポイントゼロ。
チャウランは負けてしまった。
「大丈夫よ、お母さん達はずっとあなたのことを想ってるし、ちゃんと会いに行くから寂しいことなんて何もないわ」
「うー……」
しかし、なぜ皇子が自分に嫁に来いと言ったのかチャウランには分からなかった。

◆

数日後にチャウランは王宮に招かれた。
木製の赤い壁と恐らくそこまで高い必要性はないと思われる無駄に高い天井。
赤い絨毯が敷かれた廊下の両脇には金の装飾が施されたランプがあり、廊下を明るく照らしていた。
チャウランは兵士に案内されて王室に入った。

中央に配置された宝石の装飾が施された真っ赤な椅子に腰掛けていたのは豪勢な衣装を纏い、頭には純金の王冠を乗せた皇帝だった。
立派な白い髭を生やした皇帝からは、威圧感を感じた。
チャウランはカチコチになりながら皇帝の言葉を待った。

「そなたが、チャウラン殿か？」
「は、はい、そうです……」
緊張しながらも何とか言葉を搾り出す。
「では、シーゼンのこと、頼むぞ」
「え？」

チャウランは思わず目を丸くした。
自分が平民であるからてっきり反対されるものだと思っていたのだ。
気になって皇帝に質問してみる。
「いいんですか？」
「いいとは？」
「だって私、平民じゃないですか……」
皇帝は笑った。
「ワシは差別などせん。それに」
「？」
「金髪の子って好みなんじゃもん」
「……」
全力でこの場から逃げ出したくなってしまったチャウランは堪えた。
「皇族は白髪ばかりじゃからのう」
〈白髪って皇族だからだったんだ……〉
「決してワシが老けているわけではない。証拠にシイゼンも白だっただろう？」
「そ、そうですね」
「さて、そろそろシイゼンの所へ行くといい。あまり独占してしまってはシーゼンに嫉妬されてしまうからの」
「……」
「では、リイラン！」

皇帝は脇に控えていた侍女に声をかける。
黄金色のふわふわした髪を腰あたりまで伸ばし、狐の耳と尻尾を生やした少女だった。
ただの侍女とは思えない程可愛らしい顔立ちをしていた。

〈金髪が好きだから侍女も金髪？〉

「チャウランをシーゼンの所まで案内せよ」
「承知致しました」

リイランは花のような笑顔を浮かべてぺこりと頭を下げた。

「では、チャウラン様。こちらへ」

リイランの後に続いてチャウランは王室を出た。
赤い絨毯の廊下を歩きながらリイランが口を開いた。

「チャウラン様、私はリイゼンと言います。よろしくお願いしますね」
「あ、はい」
「えーとですね、この城の地下に農場を用意したんですよ」
「農場？」
「はい、農場です。普通に野菜を育てることが可能ですよ。今の時代、ストーンを使えば日光に当たらずとも野菜は育ちます」

ストーンというのは魔法の力が込められた魔法の石である。様々な力を持つストーンが存在し、様々な用途に使われている。
チャウランもストーンを使用して野菜作りをしている。
チャウランは水と土のストーンを使っている。

最近ようやく使い方が分かってきたというところだ。
「それで、皇子がチャウラン様に好きなだけ野菜を作るといいと」
「王宮で野菜……」
しばらく歩き続けるとリイゼンがある部屋の前で足を止め、ドアをノックしてから開ける。
なかに足を踏み入れるとシーゼンの姿があった。
シーゼンは椅子に腰掛けて本を読んでいた。
「シーゼン様、チャウラン様をお連れ致しました」
「ん、その辺に置いといてくれ」
彼は本から視線を外すことなく言い放った。
〈私は物じゃないのに……〉
「では、チャウラン様。今日はもう遅いですし、お休みください」
ほわっとした笑顔を浮かべるリイゼンの言葉を聞いてチャウランは部屋のなかを見回した。
赤い机に椅子。
タンスにクローゼット。
白いふかふかの大きなベッドが一つ。
「あの……」
「何でしょう？」
「ベッドが一つしかないんですけど……」
恐る恐る尋ねてみたがリイゼンは笑顔のままで答える。

「え？　何か問題ありますか？　夫婦なんですし、お二人で寝るんでしょう？」
「……っ！？」

〈そ、そうものなのかな〉

「では、私は失礼しますね」

リイゼンはぺこりと頭を下げると部屋を出て行ってしまう。
チャウランはその場に立ち尽くした。

〈ま、まあ、人がベッドに入ってればいきないり入ってくる人もいないですよね？　ベッド独り占め！〉

そう思い、ベッドに潜った。

◆

大きな窓から差し込んだ光を顔に浴びてチャウランは目を覚ました。
あまりの眩しさにじわりと涙が目に滲む。
チャウランは目をこすりながら身体を起こした。
それとなく、視線を落とす。
隣ではシーゼンが眠っていた。

「女の子が寝てるとこに入って来ないでください……」
「何様だ君は」
「すみません……」
チャウランはぺこりと頭を下げた。
「シーゼンは、何で私に嫁に来いって……。野菜が食べたいなら、私の家からまとめ買いすればいい話なんじゃ……」
シーゼンはむっとした表情を浮かべる。
「俺が、野菜目当てでどんな女とでも結婚できると思ってるのか」
「思ってます……」
ゴツンと頭を叩かれたチャウランは頭を抱えてうずくまった。
「ごめんなさい、思ってません……」
「まあ、俺は一応皇子だからな。そんな不純な理由で結婚相手を決めたりはしないし、例え胸が小さくても受け入れるし」
「私の胸、小さいですか……」
「ん、小さい」
「うー……」
「泣くな」
「う、うー……」

野菜が二個

無駄に広くいくつもの窓があるから太陽の光が部屋中を照らし出しており、明かりなど必要のないほどである。
中央のテーブルには白い布がかけられ、大きな鳥の丸焼きだとか野菜スープだとかふかふかしたパンだったり、数え切れないほどの豪華な料理の数々が並んでいた。
チャウランとシーゼンはテーブルを囲んで朝食をとっていた。
しかし、シーゼンはパンを口に運ぶなかチャウランは目をこすりながら泣きじゃくっていた。
ポロポロと涙がテーブルに落ち、白い布にシミができる。

「うう〜……」
「君はいつまで泣いているつもりなんだ？」

不満そうな表情でパンを皿に置き、言葉を発するシーゼン。

「うー……だって、胸が小さいって」

胸が小さいと言われた程度で泣くものは滅多にいないだろう。
そもそも、その程度で泣く理由が彼には分からなかった。
シーゼンは呆れながら呟く。

「では、巨乳と言えば泣かないのか？」

チャウランはいまだに泣きじゃくりながらこくりと頷いた。
それを確認したシーゼンはサラダが盛られた皿を手に取り、立ち上がるとチャウランの顔に押し付けた。

「ふごっ！」

いきなりの衝撃に驚いたチャウランは椅子から転落して頭を床に打ち付けてうずくまった。

皿に盛られていたサラダが床に落ちる。

「甘ったれるな、それぐらいで泣くとは何事だ。飯ぐらいきちんと食べろ。作ってくれた人に対して失礼に値する」

「う……サラダを顔に押し付けて食べ物を粗末にするのは失礼じゃないんですか……」

シーゼンはしばらく沈黙し、コホンと咳払いをした。

「わざとではないと言う言葉があってだな」

「わざとでしたよね！？」

「まあ、その、何だ。さっさと食べなさい」

「床で打った頭が痛いです」

「口にパンを詰め込んでやろうか？」

「食べます……」

よろよろと立ち上がった彼女は椅子に座るとスプーンを手に取ってスープをすくった。

スープを口に運ぶと野菜の味が口のなかに広がり、身体が温かくなってきた。

パンは予想通りふわふわで少し甘かった。

「あと、これだが……食べてみろ」

シーゼンに差し出されたのはポテトサラダだった。

さっきの普通のサラダは散ってしまったから食べることはできな

い。
チャウランはスプーンでサラダをすくうと口のなかに入れて、もぐもぐと噛んだ。
「ん？　これは……」
「気付いたか？」
「うん。ポココが入ってます」
どうやらシーゼンは数日前にチャウランから回収したポココを早速料理に使わせたらしい。
「うまいか？」
「生よりうまいです」
「だろうな」
シーゼンはにこりと笑った。
チャウランも自分でポココを料理したことは何度もあったが、家に満足な調理器具や材料がなかったため、そのまま焼いたりスープに入れたりというシンプルなものばかりだった。
「でも、これはポココのおかげですよね！」
「自身過剰だな」
チャウランが食事を終えるとシーゼンが口を開いた。
「今から案内したい所がある。とりあえず着替えてもらおうか」
「着替えるって何に？」
思えばチャウランは着替えとなるものを何一つ持って来ていなかった。

それどころか、手ぶらで来ていた。
何か服を買うにしてもお金を持っていないし、どうにもできない。
チャウランはシーゼンの顔を伺いながら恐る恐る口を開く。

「あの、服持って来てなくて……お金もなくて……」
「心配する必要はない。そこのクローゼットに大量に入ってるから好きなのを着ればいい」

◆

ひとまず服を着替えてチャウランはシーゼンの後に続いて廊下を歩いていた。
無駄に長くてむしろ疲れてしまうような廊下には赤い絨毯が敷かれ、目も疲れてしまいそうだった。
廊下を歩き続けていると、廊下ですれ違う侍女達は全員道を開けていた。
しばらく歩くと行き止まりに辿り着いた。
そこには下に下りるための階段がある。

「う……階段も長そうだなぁ……」

息を切らしながらチャウランが呟くとシーゼンは振り向いて、むっとした表情で尋ねる。

「何か言ったか？」
「い、いえ、何でもありません……」
「あ、そのな、敬語じゃなくていい」
「え？　な、なぜでございましょうか……？」

チャウランが目を丸くしてオロオロしていると彼は苦笑いを浮かべて肩を竦めた。

「主と従者というわけでもないし、何せ一応夫婦だからな。差があるのはおかしいだろう」
「りょ、了解」

チャウランはあせあせと敬礼のポーズを取ってみた。

「さて、行くか」
「何も突っ込まないのだね……」

思った通り、階段もかなり長かった。
老人がこの階段を使ったら途中で転落してしまいそうな気がしてならなかった。
ようやく辿り着くと薄暗い広間だった。
多くのランプ照らされており、特に不便は感じなかった。
その広さにも驚いたが畑があることが何より驚くことだった。
きれいに耕された畑が十個程度並んでおり、近くに置かれた箱のなかには必要な水や土のストーンも用意されている。

「おお……これは、広すぎじゃないかぁ……」
「全部使う必要はない。まあ、思う存分育てるといい。できるか？」
「もちろん！　……あ」

チャウランは困ったような顔になった。

「どうした？」

その様子に気付いたシーゼンは不思議そうに彼女の顔を覗き込んだ。

「……その、種がないというか……」

ごにょごにょと口ごもる彼女の額をパチンと叩き、彼は箱を指差す。

「箱のなかをよく見ろ」

言われた通りにしゃがみ込んで箱のなかを覗き込むとポココの種と他の種も用意されていた。

「これは……」

「君の家からもらってきた」

「な、なるほど！」

〈しかし、ここに来ても農業……〉

「燃える……」

「野菜を燃やさないようにな」

「分かってる」

「では、いつでも好きなだけここで農業をやるといい」

「了解」

「今からやるのか？」

そう聞かれ、迷ったが頷いた。
「ん、じゃあ、俺は上でやることがあるからおいとまする。何かあったらそこのエストレッタに尋ねるといい」
シーゼンが指差した方向に視線を移すと少女がいた。
少し小柄な、青いツインテールでメイド服を着た少女である。
どういうわけか、チャウランは今まで彼女の存在に気付かなかった。
〈気配を殺してたということで……！〉
「エストレッタ……。変わった名前だね？」
「まあ、エストは他の国から留学してきてるからな」
「留学。つまりお金持ちか。でも、何で侍女に……」
「貴族が留学して使用人をやるのは珍しいことじゃない。まあ、とにかく俺は上に戻る」
「了解」
シーゼンが姿を消すと広間には沈黙が訪れた。
ゆるやかな風の音だけが聞こえる。
沈黙に耐えかねてチャウランは笑顔を浮かべつつ、口を開いた。
「よ、よろしく。エストレッタさん」
「むー……エストでいいの」
「じゃあ、エスト」
「むん」
「……」
「そっちはチャウランでいいの？　呼び捨てでいいの？」

「いいのです」
「チャウランなの」
「じゃ、じゃあ、早速」

チャウランは土のストーンを手に取った。
ギュッと握り締めるとストーンが光りだし、茶色いスコップが目の前に現れた。
それを握るとチャウランは自分の頬をパチンと叩いた。

「よし！」
「失敗しちゃダメなの」
「しないよ、多分……」
「多分は、めっなのー」
「りょ、了解！」

野菜が三個

スコップを握ったチャウランは種を植えるために地面を掘り始める。
さくさくという音が響き、地面に穴が開いていく。
ちなみにチャウランの使っているスコップはストーンの力により生成されたもので、普通のスコップとは違って硬い地面でも簡単に掘り返すことができる上まとめて一列繋げて掘る場合はこのスコップの《マジック》を使うことで一瞬で一列掘れてしまう。
しばらく掘り続けていると、エストが声をかけてくる。

「まだなの？」

無表情で言葉を発する。
エストはどうやら、思っていることは顔に出さないらしい。
何を考えているのか分かりにくい。

「まだ」
「むー……」

エストは少し頬を膨らませる。
そして、箱のなかから土のストーンを取り出す。
ギュッとストーンを握ると淡い光が溢れ出し、スコップが出現する。
それを握ったエストはチャウランの隣にしゃがみ込んだ。

「じゃあ、私も手伝う」
「ホントに？　ありがとう」

チャウランはにっこりと笑った。
エストは無表情のままで地面を掘り始める。
さくさくと掘り進め、あっという間に終わってしまった。
チャウランはぐるりと畑を見回す。
すっかり穴だらけになっていて、準備は完璧だった。

「すごいなー。エストちゃんって仕事早いよね？　やったことあるのかな？」
「む、あるの。ここでは花を植える仕事もやらされてるの」
「な、なるほど」

確かにこの王宮の中庭には、大量の花が咲き誇る花畑があった。
あれだけ巨大な花畑の手入れでもしていれば、穴を掘るのが速くても何の不思議もない。
とりあえずチャウランは次の作業に移るために箱からポココの種を取り出した。

「と、とりあえず今日はこれだけ植えて……！」
「休むのですなー」
「そ、その通り」

エストに言われて素直に頷いた。

〈まだここに慣れてないから休む〉

ポココの種を半分エストに渡すと掘った穴に入れて土を被せる。
その作業が終了すると次に水のストーンをギュッと握り締めた。
出てきたのは可愛らしいデザインのジョーロだった。
チャウランは畑の中心に立ち、そのジョーロを振り回した。
畑全体に水が降り注ぐ。

「これで、よし」
「もう終わり？」
「終わり」

スコップとジョーロをストーンに戻し、片付けを済ませると階段を上がり始める。

◆

部屋に戻ると椅子に腰掛け、本を読んでいるシーゼンの姿があった。
彼はチャウランに気づくと顔を上げた。
特に変わった様子もなく口を開く。

「終わったのか？」
「とりあえず。用って本を読むことだったとか？」
「まあ、勉強は必要だからな」
「文字とか読めるんだ……」
「君は読めないらしいな」
「平民は勉強なんかしないし、文字が読めるわけない」

「勉強しなくても生きていけるからな」
「うん、でも」
チャウランは頷き、口を開く。
じっとシーゼンの持っている本を見つめていた。
「本とか読んでみたいと思うこともある。どんな物語があるのか気になるし」
「ん、では呼んでみるか」
「了解……と言いたいけど文字が読めないって」
「そうだったな」
シーゼンは本を引き出しのなかにしまう。
そして沈黙が流れる。
どちらもその場を動かぬまま、窓から入ってくる風の音だけが部屋のなかに響く。
沈黙に耐え切れず、チャウランは気になっていたことを尋ねる。
「シーゼンは……何で私を」
「君もなぜ男女が結婚するかぐらいは知っているだろう」
淡々と告げるシーゼンに対して、チャウランは顔を赤く染めながらごにょごにょと口ごもる。
「それは、その……あれ。子作りして子孫を残すため……だったっけ……」
シーゼンはため息をついた。
「俺がしているのは、その話じゃない。なかには子供を作らぬ者も

いるだろう。なぜ、誰かと結婚しようと思うのか」
「だから、それが聞きたいんだって。普通は好きな相手と結婚するし、何で私と」
「君は俺を信用してないな？」
「信用？」

チャウランは怪訝そうに眉をひそめた。

「俺が君のことを好きではないと言いたいんだろう？」
「んーと、そうなるかな」
「黙れ、バカが」
「バカって……」

反論しようとしたところで、不意に引き寄せられ口づけをされた。

「……っ！？」

チャウランは目を丸くした。

「どう愛情表現をやれば分かるんだ、君は」
「う、あう……」

お互いに顔を赤くしながら沈黙。
そして、少したつとチャウランは泣き始める。

「うー……」
「まさか……そんなに嫌だったのか……？」
「バ、バカ……そういうわけじゃ……」

チャウランはごしごしと目をこすながら言う。

「やはり、君は何も知らないな」
「何を……」
「俺は以前から君の存在を知っていたし、それに……」
「それに？」
「君はまだ俺のことも好きではないだろうが」
「嫌いというわけでも……」

嫌いだったら、親がすすめてくれても絶対に王宮には来なかっただろう。
ここに来たのは、何か自分の道が開けるのではと思ってのことだった。
シーゼンは真剣な表情でチャウランの姿を見据えながら再度口を開く。

「まだ遅くはない。これからでも、充分仲良くはなれるだろう」
「好きになれってことかな。りょ、了解！」

チャウランは敬礼のポーズをとってみた。
すると彼は苦笑いを浮かべて肩をすくめた。

「了解とは、嫁が言うセリフではないな。では、俺に尽くしてくれるか？」
「それはちょっと……」

そう言っていると頬をつねられた。
チャウランは涙目になりつつ、返事をする。

「りょ、りょーかい」
「よろしい。そうだな、俺はその君の了解という言葉が好きだ」

「了解……」
「あと、最後に一つ、約束してほしい」
ぎゅっと抱きしめられ、チャウランは目の前がぐるぐるした。
今にも気絶してしまいそうでうーだのきゅーだの呻き声を上げた。
「俺より先にいなくならないように。これだけは守ってくれ」
「りょ、りょーかい……」
〈先に死ぬなってことかな〉
「それで、その……」
「ん？」
「私は、暗殺されたりなんてことは……」
「ないから安心しろ。不審者が侵入することできないはずだ、多分」
「多分！？」
「多分」
「じゃ、じゃあ、私は野菜しか作れないから何かあっても何もできないから、何かあったら……ま、ま、ま、まままもっ……守ってくれると嬉しいというか……べ、べつに……守られなくても、安全に生活さえできれば」
パニック状態で喋るチャウランにシーゼンが制止をかける。
彼女の頭にチョップをお見舞いして黙らせた。
ぐわんぐわんするチャウランに一言。
「とりあえず、落ち着け」
「りょ、りょーかい」
「ま、まあ、どうしても言うなら守ってやらないこともないがな」
「べ、べつに守ってほしいってわけじゃ……」

「……」
「……」

お腹が減ったチャウランは何かもらおうと厨房に向っていた。
広い廊下を歩き続け、厨房に辿り着く前に倒れてしまいそうな気がしていた。
しかし、気力を振り絞って歩き続けていた。
何を食べさせてもらおうかと考えていると自然と楽しい気分になる。
ふと、パタパタと足音が聞こえた。
誰か来るのかと前方を見ると、白いドレスを着た異国人と思われる少女だった。
栗色の長いふんわりとした髪を腰まで垂らし、一部分を後ろで束ねている。

なぜか彼女は止まる気配がなく、避けきれずに思い切りぶつかってしまった。
二人は床にしりもちをついた。

「うー……」
「ご、ごめんなさい」
「ん？」

見覚えのない人物だったにで、チャウランは首を傾げた。

「あ、あなたはもしやチャウランさんでは？」
「合ってるかな」

「シーゼン様のお嫁さんですよね！　あ、私はローゼリアと申します」
「ローゼリア……。ところで、何で走ってたの？」
「すみません、お恥ずかしいところを……。実は、セージル様を探していたのです」
「セージル？」
「あれ？　まだ存じませんか？　シーゼン様の弟君ですよ」
「弟……。ローゼリアは……」

見たところ侍女には見えない。
使用人以外で皇子を探す人物が存在するだろうか。

「あ、私ですか」

ローゼリアはにっこりと微笑んだ。

「私はセージル様の婚約者です」

野菜が四個

「婚約者？」

チャウランは首を傾げた。

目の前にいるローゼリアは、シーゼンの弟の婚約者だと確かに言っている。

ローゼリアは花の飾りが施された純白のドレスに身を包んでいる。

その外見は、姫か貴族令嬢のようだった。

すると、ますます疑問が頭に浮かび上がってきた。

弟には婚約者がいるのに、シーゼンにはいなかったのか疑問に感じた。

弟にだけいて、兄にはいないと言うのもおかしい。

〈どうなんだろう……〉

婚約者がいたのに、自分を選んだのかそれともいなかったのか気になったがあまり考えないようにしようと決めた。

ローゼリアに視線を移す。

彼女はシーゼンの弟であるセージルを探していると言っていた。

しかし、生憎まだセージルとの面識はなく、居場所も知らない。

チャウランは、どうすればいいかと思考を巡らせ、笑顔を浮かべた。

「じゃあ、私も一緒に探すから」

ローゼリアはぱあっと明るい表情になり、ぺこりと頭を下げる。

「では、お願いしますわ」

◆

居場所は分からないので、王宮内を適当に探して回ることとなった。
セージルの部屋にも行ってみたが見つからず、広間や食堂にもいなかった。
使用人達にも聞いて回ってみたが誰もどこに行ったのか知らなかった。

「何でこうも……」

チャウランはため息をついた。
王宮には大勢の使用人がいるから、誰かが姿を見かけていてもおかしくないと思ったのだが、どうやらセージルは隠れるのがうまいらしい。

〈でも、何で隠れたりするんだろ〉

チャウランは、王宮内を走り回って疲れたのか床に手をついて息を切らしているローゼリアに声をかける。

「セージルさんは何で隠れたりするの？」
「セージル様は脱走して町に行くのが好きなんだそうですわ」
「何でそれ、先に言わなかったかな」

「ぐ……単に忘れてました」

王宮から脱走となると、ここにはいない。
いるとすれば、町だろう。
しかし、王宮内は自由に動けるが、王宮から出るとしたらどうなのか疑問が生まれる。
その疑問を解消するべくローゼリアに尋ねることにした。

「私達ってここから出られる？」
「多分出してもらえません。何かあったら大変ですもの」
「で、ですよね……」
「では、私も脱走するしか……！」

ローゼリアが両手で握り拳を作ってやる気を出していると足音が聞こえた。
恐る恐る振り向くとシーゼンの姿があった。
じっとこちらを見る。

「し、シーゼン様……」
「わざわざ探しにいかずとも日が沈む頃には戻ってくるだろう」
〈どうせ時間になれば戻ってくるなら、探す必要もなかったかな〉
ローゼリアはすぐにでも伝えたいことがあったのかもしれないが。

◆

大きな窓から外を覗くと、空は漆黒の闇に包まれ多くの星が散りばめられ、煌いていた。丸い月は淡い光を放ち、ぼんやりと地上を照らし出していた。
町の方を見ると、明かりが見える。
そして部屋のなかを見回す。
椅子に腰掛けて分厚い本に真剣に目を通しているシーゼンの姿。
ベッドの脇の椅子の上で正座してそわそわしているローゼリアの姿。

「ところで……」
「何でしょうか？」
「何でローゼリアはここに？」

尋ねると彼女は、にっこりと可愛らしい笑顔を浮かべる。

「一人で待つのは寂しいですから」
「……」

チャウランは何も言わなかった。
恐らく何を言っても無駄だろうと思い、言葉も出て来なかった。

「あ、私のことは気にせずに好きなだけイチャイチャしてていいんですよ？　キスでもベッドでイチャイチャでも」
「するかボケ」

そんなやりとりをしていると、シーゼンが本を閉じて机に置いた。
「チャウラン、ソイツをつまみ出せ」
「りょ、了解」
チャウランはローゼリアの腕を引き、部屋の出口へと向かう。
ローゼリアはじたばたと暴れ、床に座り込む。
そして半ば涙目になりながらチャウランの顔を見ながら口を開く。
「何するんですか！　私はここで待つんです！」
そう言いながら首を左右に振る。
腕を引っ張って立ち上がらせようとしても、身体に力を入れて意地でも立ち上がらずについには、床でうずくまって動かなかった。
どうみても高貴な家柄の者がするようなことではなかった。
どうやら、彼女にはあまり品というものがないらしい。
外見だけは可愛らしいけれども。
チャウランが困り果てていると、不意にドアが開いた。
「こんばんは、やっぱりかぁ」
一人の少年だった。
シーゼンと同じく雪のような白銀の髪を特に束ねる必要もなさそうな長さだが少しだけ束ね、海のような青い瞳。そして赤い礼服を身に包んでいた。
彼は苦笑いを浮かべて、ローゼリアに声をかけた。
「君はまたそんなことをしてるのかい？　今なら見放さないから、早く立つといいよ」
「セージル様！」

ローゼリアは慌てて立ち上がり、彼の元へ向かった。
「セージル？」
チャウランは首を傾げた。
セージルは確か、シーゼンの弟の名前だ。
「え？　じゃあ、あれがシーゼンの弟？」
「ん、その通り」
「な、なるほど……」
シーゼンとセージルを見比べてみる。
髪の色は同じで目の色は違う。
性格も違うように思える。
チャウランは呆然とした様子で一言漏らす。
「セージルさんの方が愛想は良さそうだ……」
「今、何と？」
「何でもない……」
ようやくローゼリアの相手が終わったのか、セージルはこちらに来た。
そして満面の笑顔を浮かべて挨拶する。
「はじめまして、君がチャウランだね？」
「う、その通り」
「俺はセージル。よろしくね」
「よろしく」
「可愛いなぁ。兄さんも女の子の好みはまともだったんだね。この

子もらっていい？」
「そこの婚約者はどうする気だ」
ローゼリアは泣きそうな顔をしてぷるぷる震えていた。
それを見て彼は苦笑いを浮かべた。
「やだなぁ、冗談だよ。流石に兄さんのお嫁さんに手を出したりはしないさ。じゃあ、今日はこの辺で」
セージルはローゼリアを連れてその場を後にした。

「しかし、ローゼリアは可哀想だな」
ふと、シーゼンがそんなことを呟いた。
ベッドでうとうとしていたチャウランは起き上がり、身を乗り出した。
「何で？」
「セージルが相手ではな」
「そうかな？　ローゼリアはホントにセージルさんのこと好きみたいだったけど」
「それが余計に不憫だな。アイツは浮気性だからな」
「浮気性……」
皇子が浮気性とは大問題である。
町に出かけるのが好きというのも、町で可愛い女の子を探すため

なのかチャウランは気になった。
もし、セージルが婚約者がローゼリアじゃなく他の女の子でも問題ないとしたら――。
〈ローゼリアはどうなるんだろう〉
セージルはローゼリアを好きなのか。
嫌いではないだろう。
恐らく好きという部類には入っているはずだ。
しかし、ローゼリアでなければならないと言ったら実際どうなのか心配になってきた。
「どうなんだろう……」
「……」
難しい表情を浮かべて考え込むチャウランにシーゼンは口づけした。
「そのことは考えなくていい。むしろセージルには関わるな、ろくなことがない。何も考えずに寝ろ」
「うー……いきなり何するんだぁ……。私の家には、おやすみのキスの習慣なんて……」
恥ずかしくなってとりあえずに布団に潜った。
〈ローゼリア達のことは、こっそり考えよう〉
そう思いながら、チャウランは目を閉じた。
視界が真っ暗になり、眠りに落ちる。

野菜が五個

朝食を済ませるとチャウランは地下の畑を確認しに行くことにした。
ベッドの周囲に取り付けられた赤いカーテンを閉めるとベッドの上で着替え、ベッドから降りた。
今日も本を読むシーゼンに声をかける。
あまり邪魔はしないようにと大声は出さずに、小さめの声で。

「じゃ、地下に行ってくる」
「行って来い」

彼は、真剣な表情で本から目を放すことなく返事をした。
それを確認すると部屋を出る。
部屋を出ると廊下にはエストが控えていた。
彼女はチャウランに気づくと相変わらずの無表情で尋ねてくる。

「畑に行くの？」
「うん」
「じゃあ、案内するの」

そう呟き、エストはくるりと背を向けた。
表情から感情を読み取ることはほとんどできないが、意外と親切なのかもしれない。
愛想がいいとは言えないが、好感を持てる人物だった。

エストの後に続いて階段を下った。
階段を下るのは相変わらず重労働だった。その上、無駄に長いため余計に疲れてしまう。

地下に農作業をするにせよ、階段を上がって部屋に戻るための体力は残しておいた方がいいだろう。
ようやく階段が終わると一面に畑が見えた。
昨日水を撒いた地面は乾いていた。

「よし、水を」

畑の脇に置かれた箱から水のストーンを取り出した。
ギュっと握り締め、ジョーロを出現させると昨日と同じ手順で畑の中心に立ち、水を振りまいた。
たったの一振りで水が畑全体に広がる。

「早く大きくなるといいな」

にこにこしながら呟いているとエストが問いかけてくる。

「でも、まだ芽も出てないの」
「う……分かってる」

〈単に早く大きくなるといいなって言っただけなのに〉

箱のなかを整理していると、足音が響いて来てローゼリアが階段を下りて来た。
彼女は、明るい表情を浮かべてさして階段で疲れた様子もなく、チャウランの元へとやって来た。
声を発する前に畑を関心した様子で一通り見回し、チャウランに向き直る。
ぱあっと明るい笑顔を浮かべた。

「ここがチャウランの畑なのですね？　お野菜、楽しみにしてます

わ」
「知ってたの？」
チャウランが不思議そうに首を傾げていると彼女は笑顔のまま、こくりと頷いた。
そして丁寧に説明してくれる。
「もちろんですわ、シーゼン様からお聞きしていましたもの。それに、私もチャウランが作ったポココを頂きました」
「ポココ、どうだったかな？」
恐る恐る尋ねてみた。
「とっても美味しかったです。チャウランのご家族はみんな農業をやってらっしゃるんですか？」
「うん。親戚も農業やってる人しかみないなぁ。あ、いや」
「？」
「伯母さんは家庭教師とかやってたみたい。どこの家行ってたか知らないけど」
「家庭教師ですか。珍しいですね」
確かにローゼリアの言う通りだった。
そもそも平民というのは、ほとんど勉強などしない。
だから当然、人に教えることもできない。
家庭教師も当然、貴族の者ばかりだった。
チャウランの家系はみんな平民で親戚のなかにも貴族だった者は一人もいない。
そのなかで、なぜ伯母が家庭教師をしていたのか謎だった。
しかし、伯母は数年前に亡くなって今は確かめることはできない。
両親に尋ねてみたことはあるが、何も知らない風だったから分か

らずじまいだった。

「でも、世の中には天才という部類の方もいますしね。もしかしたら、その伯母様は天才で勉強を習わずともできた方なのかもしれませんわ」

「確かにそうかも……」

何となく納得した。

そんななか、少しだけ伯母のことを思い出した。

伯母は他の人とは違ってチャウランにとって不思議な存在だった。

美人で優しく、そして何か自分に近いものを感じていた。

それが何なのかは分からなかったが、随分と親しくしていて伯母が亡くなった時は何日も寝込んでしまった。

「あ、もう上に上がろう？」

「そうですね」

◆

廊下を歩いていると、不意にローゼリアが足を止めた。

チャウランは気になって彼女の顔を覗き込んでみた。

「どうしたの？」

「実は、国王様に用事があったんです」

「そうなんだ。じゃ、行って来なよ」

国王に用事というなら、何か大事な用事かもしれないとチャウランはついて行かないことにした。

ローゼリアは「ごめんなさい」とぺこりと頭を下げて謝りながら早足で駆けて行った。

ドレスを着た女の子が廊下を走る姿はシュールなものだった。

あんな服装で転んでしまわないのか少し心配でもあった。

エストも他の仕事があるらしく、分かれると一人で部屋に向かうことにした。

無駄に広い廊下にポツンと取り残されているような気がした。

「べ、べつに寂しくなんか……」

「あ、チャウランじゃないか。そんな寂しそうにしてどうしたの？」

振り向くと笑顔を浮かべたセージルの姿があった。

愛想がいいのはもはや特徴だろうか。

この人物がローゼリアの婚約者であり、シーゼンの弟。

何を言えばいいのか迷っていたが、昨日のことを思い出して尋ねた。

「今日も町に出かけるの？」

「うん、そうなるかな。どう？　良かったら連れてってあげるけど？」

そう言われて少し迷ってしまった。

チャウランはこの王宮には来たが、今だに町のなかを見て回ったことはない。

実際はどんなものがあるのか気になっていたところだったが、首を左右に振った。

「それは無理かな。お、怒られそうだし……」
「だろうね。ああ見えて兄さんは怒らせると厄介だしね」
「お、怒らせるとダメなんだ……。それより、ローゼリアを連れていってあげた方が……」

するとセージルは困ったような顔をした。

「ローゼリアは……ダメかな」
「何で？」
「いろいろとあるんだよ」

何があるのかチャウランには見当もつかなかった。
普通に王宮から連れ出して遊ぶことには何か問題があるのかもしれない。
しかし、外へ出ていろんなところへ連れて行ってもらえる方がローゼリアも嬉しいはずである。
セージルとローゼリアの間には何かが足りてない気がしてならなかった。

「あ、そうだ。今日は夕方には戻ってくるから、よかったら話でもしない？」
「？」
「兄さんのお嫁さんがどんな人なのか気になるしさ」
「分かった」

チャウランはこくりと頷いた。
彼女もセージルと話し合いがしたかったから。
実際、セージルがどういう人物なのかもはっきりは知らないし、ローゼリアとの関係はどういうものかも疑問だった。

彼はローゼリアが自身のことを想っているようにローゼリアのことも想っているのか。

〈愛がなければ何も芽生えないと言うし……〉

考え込みながらセージルを見送った。

そして部屋に戻ることにした。

◆

部屋に戻るとテーブルに肘をついてクッキーを食べるシーゼンの姿があった。

テーブルに置かれた丸い形のクッキーからは甘い香りが漂ってきた。

目を輝かせながらじっとクッキーを見つめていると、シーゼンは呆れ顔で一言。

「そんなにほしいなら、食べればいいだろう」

「う、うん」

チャウランはこくりと頷いてテーブル前の椅子に腰を降ろした。

クッキーを一つだけ手に取り、丸ごと口に入れた。

サクサクとした食感で中は少し柔らかくて甘いクッキーだった。

「う、うまい」

「そこは美味しいと言った方が……」
「？」
「もういい」

クッキーの隣に用意されていたジュースも口に含む。
チャウランは難しい顔をしてクッキーをかじりながら、呟く。

「ところで」
「ん？」
「結婚した後ってこんなもんなのかな」
「まあ、今の状態なら……ただの同居人、もしくは友人といったところだな」
「シーゼンはどういう経緯で私のことを好きに……。んと、一目惚れされるような外見でもないしさ……」

実際、チャウランは可愛らしい外見ではあるが、絶世の美女だとか一瞬で相手が恋に落ちるようなものではない。
そして、皇子が単なる一目惚れで結婚相手を決めるというのも考えにくい。
するとシーゼンは難しい表情をした。

「俺は、以前から君を知っていた」
「前から……？」

一体どういうことなのか分からない。

「以前に君のことを教えてくれた人物がいる。それだけだ」
「……」

自分の知り合いでシーゼンと話したことのある人物がいるとは驚

きだった。
思考を巡らせてみたが、それが誰なのか見当もつかなかった。
全員平民で、王宮に足を踏み入れることができるような者は一人もいなかったはずである。
シーゼンは席を立ち、窓の脇の椅子に腰を降ろした。

――じゃあ、俺が守っていい？

――あなたは子供で、私は大人なの。だから、それは難しいわ

――でも……。

――じゃあ、お願いしていい？　あの子を……。

〈説明するのは難しいな〉

シーゼンはため息をついた。

野菜が六個

空が夕焼け色に染まって来た頃、チャウランは王宮の入り口でセージルを待ち構えていた。
入り口の前で仁王立ちし、明らかに邪魔になるだろう位置にいた。
じっと入り口を見つめていたが、なかなか人が入って来る気配はない。
脇に立つ兵士が困ったような表情をチャウランを見つめていた。
やがて、彼はチャウランに声をかける。

「チャウラン様、一体どうしたのですか？」

そう尋ねられ、チャウランは迷わずに答えた。

「セージルさんに話があるから待ってる」
「そ、そうですか……」

兵士は何も入り口で待つ必要はないにと思いながらも、後ろに下がった。
じっとしていると、ようやく扉が開いた。
大きな扉はギィと音をたてて、ゆっくりと開いていく。
扉が完全に開き、セージルの姿が見えると彼の元へと駆け寄った。
セージルは目を丸くしてチャウランの姿を見た。
首をかしげて一言。

「一体どうしたの？」
「話をするって言ってたから……」
「ああ、何だ。そういうことか」

セージルはにっこりと笑顔を浮かべた。

「そんなに俺に会いたかったんだね？　兄さんに怒られても責任取れないからね？」

「なわけあるかぁ！　単に聞きたいことがあるだけ！」

「そうなんだ？」

セージルは周囲を見回し、チャウランに向き直る。

「ここじゃあ、話しにくいから移動しようか」

◆

セージルの後に続いてチャウランが辿り着いたのは中庭だった。

白いテーブルと椅子が用意されており、花壇には大量の薔薇が咲き誇っていてお茶をするには絶景のスポットである。

赤く染まった空のせいか、赤みを帯びた風景はどこか懐かしさを感じさせる。

セージルに促されてテーブル前の椅子に腰を降ろすと、侍女がクッキーと紅茶を運んで来た。

甘い匂いの漂うクッキーを見ると食欲がわいた。

しかし、紅茶を見てチャウランはうっと難しい顔をした。

「どうかしたの？」
「えと、私は紅茶は飲めないというか……」
「あ、そうだったんだ。じゃあ、ジュースを持って来てくれる？」

セージルが侍女に声をかけると彼女はこくりと頷き、その場を後にした。
とりあえずチャウランは目の前の皿に盛られたクッキーを一つ手に取って口に含んだ。

「で、話ってのは何かな？」
「それは……」

言いかけて口を噤んだ。
いざとなるとどう言えばいいのか分からなかった。
普通に本当にローでリアのこと好きなんですかなどと聞くのは失礼な気もした。

「んと、忘れたかな」

とりあえずそう言うしかなかった。
セージルはそれを聞いて苦笑いを浮かべた。

「そうなんだ？　おっちょこちょいなんだなぁ」
「うー……」

むっとしたが、忘れたことにしてしまったので反論はしない。
セージルは紅茶を飲み、カップをテーブルに置くと口を開いた。

「チャウランはここに来て楽しい？」

「え？」

急な質問で目をぱちくりさせた。

あまりにも単純な質問。

突然シーゼンに求婚され、両親に背中を押されて結婚してここでも農業生活。

大好きな農業ができること、仲のいい人ができたこと。

これだけあれば、彼女にとって不足はなかった。

「うん、楽しいかな」

チャウランは笑顔で頷いた。

「それは良かった。俺も楽しいよ」

そう言いながら、セージルは笑顔を浮かべて手招きをした。

チャウランは不思議に思いながらも立ち上がり、セージルの元へと行ってみる。

すると不意に抱きしめられた。

チャウランは顔を真っ赤にした上に混乱した。

「せ、セージルさん……？」

「可愛いなあ、真っ赤だよ？」

「あ、あああの……これは、浮気というやつでは……」

「そうかもしれないね」

〈いやいや、そうかもしれないねじゃないだろこれー！〉

もしかしたら、いつもで町で女の子と遊んでいるかもしれないと不安を感じ始めた。

もし、そうならローゼリアはどうなのか心配だった。
「私、一応人妻で……」
とか言ってみる。
ふと、足音が聞こえた。
振り向くとシーゼンの姿があった。
「……詳しい話は後でゆっくり聞こう」
「はい……」
シーゼンに腕を引っ張られてその場を後にした。

◆

部屋に戻るとシーゼンはむすっとしていた。
彼がチャウランの方を見ると、チャウランはなぜか姿勢を正した。
「あれだけ関わるなと言っただろう」
「な、何で関わっちゃダメなのかな……」
そう呟くと、シーゼンは困ったような表情を浮かべた。

ため息をつき、チャウランを引き寄せた。
チャウランは驚いて身を強張らせた。恐る恐るシーゼンの顔色を伺う。
「説明しないと分からないのか？」
「う……」
何を言えばいいのか分からずに口を噤んだ。
しばらく何の会話もなく沈黙が流れた。
シーゼンに険しい表情で見つめられ、チャウランはぶるぶる震えだした。
「う、うー……」
「……チャウラン」
「うー……ごめんなさい」
チャウランが泣き出すとシーゼンは困ったような表情を浮かべた。ぐすぐすと目をこすっていると、シーゼンはチャウランを抱えたと思うとベッドに放り投げた。
チャウランは何が何だか分からず、目をぱちくりさせた。
「し、シーゼン……？　ぐす……そ、その……私、まだ経験とかないし、具体的に何するのかしらないし、まだ十六歳だし……というかあんな恥ずかしいことできません。うー……」
シーゼンはそう口走るチャウランの額を叩いた。
チャウランは「はうっ」と声を出し、うずくまってさらにぐすぐす泣いた。
「君はバカか。泣いてる相手にそんなことするわけないだろう」

「じゃ、じゃあ、なに……」
彼は引き出しからハンカチを取り出して、チャウランの顔を拭いた。
その後、彼は笑顔で告げた。
「今日はもう休め」
「んと、寝ていいの？」
「ああ」
「でも……」
セージルとローゼリアのことが脳裏をよぎる。
彼が町で他の女の子と浮気をしているかもしれない。
恐らくそれをローゼリアは知らないだろうし、もしそれを知ってしまったらローゼリアは傷付くだろう。
何とかセージルに浮気をさせないようにしたいと思っているのだが。
考え込むチャウランの姿を見て、シーゼンはため息をついた。
「仕方ないな」
そう呟き、彼はチャウランの頭をわしゃわしゃと撫でた。
「そんなに二人のことが気になるなら、俺も手伝ってやるから安心して今は寝ろ」
「ん、分かった」
こくりと頷いた。
そして布団に潜る。

◆

目を覚まして、起き上がると窓の方を見た。
窓から見える外は真っ暗で星の光がちらほらと見えた。
時計に視線を移すと、まだ夜であることが分かった。
ぐうとお腹が鳴ってチャウランはお腹を押さえた。

「お、お腹が……晩ご飯を……」

よろよろとベッドから出て、食べ物を求めて廊下へと出た。
まだ眠い目をこすりつつ、無駄に長くて赤い絨毯で目がおかしくなりそうな廊下を歩き続けた。
そうしていると、前方からリイゼンが歩いてきた。
リイゼンはチャウランの元へと来ると笑顔を可愛らしい笑顔を浮かべる。

「こんばんは、チャウラン様。起きてらっしゃいましたか？　えーと、お腹は空いてますよね？」
「うん、ご飯ほしい……」
「ですよねー。皇帝様が一緒に食事しないかと言っておられます。どうですか？」
「うん、いただきます」

「では、案内しますね！」

チャウランはリイゼンの後に続いた。
この王宮に来た最初の日以来、皇帝には会っていなかった。
同じ王宮にずっといるというのに不思議なことである。
皇帝は厳格な雰囲気はなく、のんびりした感じの接しやすい人柄でチャウランも安心していた。

皇帝専用の食堂に行くと、白い布がかけられた大きなテーブルがあり、そこには色とりどりの食べ物が並べられていた。
具がたくさん入ったスープやパスタ、丸焼きなど、やはり平民にはなかなか食べられないものばかりである。
皇帝が椅子に座っていて、その傍らにいたのはシーゼンだった。
皇帝は愛想良くチャウランを出迎えてくれた。

「おお、来たかチャウラン。そこに座りなさい」
「は、はい」

促され、チャウランはテーブル前の椅子に腰を降ろした。

「さて、チャウラン。この王宮での生活はどうかの？」
「んと、楽しいです」
「それは良いのぅ。やはりお嫁さんには楽しく生活してもらわないと困るからの」

皇帝はお茶をすすりながら告げた。
チャウランはシーゼンに視線を移した。

「シーゼンは食べないの？」
「ん、俺はもう済ませたからな」
「そうなんだ……」

チャウランはチキンにかぶりついた。

「それにしても、金髪っ娘は可愛いのぅ。チャウランはワシの妻の若い頃に似ておるのぅ」
「そ、そうですか……？」

皇帝に妻がいるのは当然のことだろう。でなければ、皇子が生まれるはずはない。
ただ、后妃の姿を見たことがなかった。
いるなら、必ず紹介されていただろうし、既に亡くなっている可能性が高いと思い、そこには触れないことにした。
しかし、皇帝はよほど金髪の女の子が好きらしい。
口ぶりからして、后妃も金髪だったのだろう。

「チャウラン、シーゼンなどやめてワシの嫁にならんかの？」
「それはちょっと……」
「うーむ……仕方ないの」

チャウランは皇帝と食事をするということで、緊張して何も話せないかもしれないと心配していたのだが、この皇帝は話しやすい相手で全くそんなことはなかった。
チャウランはスープを飲みながら皇帝を観察した。
この皇帝がシーゼンの父親なのが少し信じられなかった。
あまり似ていない。セージルも似てない。
親子でもあまり似ないものだろうかと思いつつ、もしかしたら昔はシーゼンやセージルみたいな感じだったのかもしれないとも思っ

た。
もしそうなら、シーゼンやセージルは将来こんな感じになってしまうということだが。
「今日は好きなだけ食べるのじゃ。未来の后妃に乾杯じゃ！」
「は、はい」
チャウランはこくりと頷いた。
后妃と言われて少し心配になってしまった。
自分は后妃と言えるほどの人物になれるのか少し不安だった。
平民として育ったのだから、王宮については何も知らない。
「しかしチャウランは可愛いのぅ」
どうやらこの皇帝は可愛いというのが口ぐせらしい。
しかし、息子の嫁に可愛い可愛いと連呼する父親が果たして他にいるだろうか。
「シーゼンも自慢話ばかりするしの」
「え？」
チャウランは目を丸くした。
「……父上、その話はできれば本人には……」
シーゼンは珍しく焦った様子で皇帝に声をかける。
「しかし、チャウランのことが可愛くて仕方ないんじゃろ？　伝えなくてどうするんじゃ」
「そ、それは……」

チャウランとシーゼンは二人揃って顔を赤くする。

「何じゃ二人とも初々しいのぅ。子作りはもうやったのかの？」

流石にシーゼンが皇帝の頭を叩いた。

「父上、そういう話題は出さないでほしいんだが……」

「こ、ここ、こここここ……子作り……う、う……ちょっと失礼します！」

「あ、チャウランよ！」

チャウランは慌てて食堂を出た。

「チャウラン様！？」

リイゼンが追いかけて来たが、全力で逃げた。

野菜が七個

「チャウラン様！　待ってください～！」

廊下を走っているとリイゼンがパタパタと追いかけて来る。

子作りだとかそんな話になったあの場に戻ることなどできることはなく、チャウランはさらに走る速度を上げた。

廊下を走り続けてもリイゼンはついて来る。

どうやらリイゼンは走るのは慣れているらしい。

毎日無駄に広い王宮のなかを行ったり来たりしていれば足腰も鍛えられるだろうが。

「ほっとけってー！　私、男の人と子作りの話なんか……」

できるわけがないとか続けようとした所で、廊下がいつもピカピカにきっちり掃除されているのが災いしたのか、つるっと滑って転倒した。

前側に倒れて床に思い切り額を打ちつけた。

「ちゃ、チャウラン様……！　大丈夫ですか？」

リイゼンが慌てた様子で駆け寄って来る。

「う……」

チャウランはゆっくりと起き上がった。

彼女の額は赤くなっていた。

「た、大変です！　手当てを！　手当てをしましょう！」

「え？」

◆

チャウランは怪我人の手当てをする部屋まで連れていかれた。
リイゼンはチャウランに椅子に座るように促し、棚から消毒液を持ってきた。
チャウランは首を左右に振った。

「消毒は嫌だよ……」
「でも、放っておくとひどくなるかもしれませんよ」
「で、でも消毒は……」

嫌がるチャウランを前にリイゼンは困ったような顔をした。
そもそも、消毒ぐらいでここまで嫌がる人はなかなかいない。

「チャウラン様、これを見てください」
「え？」

チャウランがこちらを見た瞬間に額に消毒液を染み込ませた布を押し付けた。

「うー……」
「痛くないですよー」

「痛いですよー……」

◆

治療が終わるとチャウランは部屋に戻ろうと廊下を歩いた。
ズキズキと痛む額を押さえながらよろよろと歩いていた。
前方を見るとシーゼンの姿があった。
チャウランは特に速度を変えることはなく、シーゼンの前まで来ると足を止めた。

「廊下は走るなと言われなかったか？」
「言われたことあるけど……」
「もう遅いから風呂にでも入って寝ろ」
「う、うん」

こくりと頷いた。
チャウランは歩き始めるが、すぐに足を止めて彼に向き直った。

「風呂の場所忘れた……」

チャウランにこの王宮は広すぎた。
今までの家と比べるとあまりにも広すぎて、まだどこに何があるのか把握しきれてないのが現状である。
シーゼンはため息をつくとチャウランを案内することにした。

彼の後に続いて風呂場へと向かう。

◆

風呂から出た後は部屋に戻り、チャウランは書庫から絵本を持ってきて目を通していた。
文字を読むことはできないから絵本で絵だけ鑑賞しようとベッドに潜って読んでいた。
シーゼンは机にむかっていて、何かを書いていた。
邪魔をしないようにと特に声をかけたりはしなかった。
窓から夜風が入り込んできて、チャウランはぶるっと震えた。
それに気づいたらしいシーゼンは、開いていた窓を閉めてカーテンも閉めた。

「そう言えば、シーゼンには婚約者はいなかったのかな」
「婚約者？」
「うん、セージルさんにはローゼリアがいるから」
「まあ、俺は既に決めてたからな。婚約者を用意する必要はなかったんだ」
つまり、好きな相手がいれば婚約者は用意しないものらしい。

シーゼンは以前からチャウランのことを知っていて、既に決めていたのだと。
しかし、どうしても彼が誰を通してチャウランのことを知ったのか分からなかった。
シーゼンも布団に潜る。
二人で天井を眺めながら会話をする。

「シーゼンは皇帝になるんだよね」
「そうだな」

自分の隣にいる人物が皇帝になる。
それは何だか不思議な気分だった。
そして自分がきちんとした后妃になれるのかも心配でならなかった。
役に立てるのか。

「シーゼンはいつも冷静だし……」
「……冷静？」

シーゼンは怪訝そうに眉をひそめた。
チャウランを引き寄せ、口づけをする。

「ん……」
「俺は冷静ではないな」
「え？　え……。だって」
「俺もどうすればいいのかよく分からない。好きなら、何をやればいいのか……」
「う……私も分からないし……」
「そうか」

チャウランはじっとシーゼンを観察した。
これといって変わった様子は見られない。
シーゼンはいつも冷静な様子を装っているのかもしれないと思った。

「一つ、真剣なことを聞くが」
「なに？」

急にシーゼンが口を開いたのでチャウランは目をぱちくりさせた。

「俺のことは好きか？」
「え？　い、いきなりそんなこと……」
「好きか嫌いか二択で答えろ」
「うっ」

チャウランは口を噤んだ。
曖昧な返答で済ませるつもりが、そう言われてしまってはしっかり答えるしかない。
顔が熱くなってきた。
ストレートに好きか嫌いか言わなければならない状況というのは結構厳しい。
恐る恐るシーゼンの顔色を伺ったが、今だに真剣な表情でこちらを見ていた。
逃げられないと悟り、ぐるぐるしながら答える。

「そ、そ、その……どっちかと言えば好きかな……」
「では、キスはできるか？」
「できません」
「即答するな。できませんじゃない、やれ」
「で、でも……」

今まで自分から誰かにキスをしたことなんてない。

「キスの仕方とかしらないし……」

「とぼけるな」

「うっ」

チャウランはカチコチになりながらシーゼンを見た。

そしてシーゼンの頬に口づけした。

「……よく分かった。君は可愛いな」

「！？」

チャウランは首を左右に振った。

そんなやりとりをしているうちに、いつの間にか眠りに落ちた。

野菜が八個

窓から差し込んだ陽光が眩しくて目を覚ました。
目をこすりつつ起き上がると、隣にシーゼンの姿は見えなかった。
どうやらシーゼンは相当早起きらしい。
チャウランの家は農家で朝早くから野菜の世話をすることが多かったので早起きなのだが。
既にテーブルには朝の食卓が並べられていた。
いい匂いが漂ってきてお腹が鳴った。
パンをかじっていたシーゼンにこちらに視線を移す。
「ん、起きたのか？　なら、早く食べるといい」
「りょ、了解」
チャウランはベッドから出ると視界がぼーっとしていたのでごしごしと強めに目をこすってテーブル前の椅子に座った。
両手を合わせて「いただきます」と言うと丸いパンにかじりついた。
やっぱり朝はパンの方が食べやすいと思いながらその味を味わった。
チャウランはセージルとローゼリアのことを思い出し、彼に話を持ちかけた。
「セージルさんとローゼリアのことなんだけど」
「そのことか」
シーゼンは考え込むように腕を組んだ。
チャウランはシーゼンを頼らない手はないと思った。

何せ、セージルはシーゼンの弟なのだから彼はよく知っているはずである。
兄弟なら、お互いのことをよく知っているだろうし、何か糸口が見えるかもしれない。
チャウランはお茶をすすりながら尋ねる。

「セージルさんは、どういう人なんですか」
「あれは女好きだな。実際、皇族であることと容姿にもそれなりに恵まれているから、女遊びはいくらでもできるだろう。性格自体はべつに悪くはないんだ」
「うん」

確かに性格が悪いようには見えなかった。
愛想が良くて誰にでも優しいといっ雰囲気である。
あれなら、充分にモテるだろうが問題は婚約者であるローゼリア以外にも恋人のように扱うことだろうか。
しかし、シーゼンとはあまり似ていない。
シーゼンは逆に、周囲から見れば少し近寄りがたい雰囲気を持っているだろう。

「俺は浮気は嫌いだからな」

むすっとした表情で呟くシーゼン。
チャウランのあの一件を思い出してはっとした。
慌てて弁解しようとする。

「あ、あれは、浮気とかじゃなくて、セージルさんが勝手に抱きしめてきて……」
「そんなことは分かっている。アイツは人の女だろうが平気で手を出すからな」

聞けば聞くほどローゼリアが不憫に思えてきた。
ローゼリアはセージルのことを慕っているというのに。

「そう言えば、何でローゼリアと婚約したの？　政略結婚とかそんな感じ？」
「いや、そういうものではないんだ」
「じゃあ、どういう……」
「ローゼリアは、異国の姫なんだが……二年前にこの国に留学してきたんだ。これがまた物語みたいな出会いでな。親の建てた別荘でこの国の教師と勉強していたんらしいんだが――」

◆

「うう……もう勉強なんて嫌です。この国の文字も書けないし……」
「ローゼリア様、きちんと勉強すればきっと――」
「私、もう頑張りたくありません！」
ローゼリアは思い切り机を叩くと椅子から立ち上がり、部屋を出た。
ドレスのまま廊下を走り続け、そのまま玄関まで行って外へと出

る。
外に出ると目に入ったのは新緑の葉をつけた木々やさらさらと透明な水が流れ、太陽の光を浴びて光を放つ小川。
目の前には、坂があり、坂の下に見えるのは町だった。
〈……町にでも行ってみましょうか。何か気晴らしになるかもしれませんし〉
ローゼリアはドレスが汚れるのに構わずに坂を下ることにした。

町まで辿り着くと、大勢の人で賑わっていて飲食店や道具屋、服屋や住宅街が立ち並び、いたるところに色とりどりの花が咲き誇る花壇が置かれ、広場には女神を象った石像が中心にある噴水があり、きれいな町並みだった。
大勢の人がいたが、そのなかでも純白のドレスに身を包んで町を歩くローゼリアは一際注目を集めた。
そんなことには気づかず、周囲を見回してはどこに行こうか悩んだ。
腕を組んで考え込む。
「どうしましょう」
「お嬢ちゃん」
「え？」
突然声をかけられ、ローゼリアは振り向いた。
そこに立っていたのは図体のでかい一人の男だった。

その男はガラが悪そうな雰囲気でニヤニヤとローゼリアの姿を見つめていた。

「連れはいるのかい？　いないなら、俺とどこか行かねぇか？」

「わ、私は……」

連れなどいないので口を噤んだ。

しかし、知らない男について行くわけにもいかない。

周囲を見回したが、誰も止めに入ってはくれない。

〈やっぱり、異国人を助けるのは面倒なんですわ……〉

「ほら、行こうぜ」

男がローゼリアの腕を引く。

「やめてください、私は……！」

「ごめんごめん、待った？」

「へ？」

そんな声が聞こえて振り向いた。

そこに立っていたのは十五、六ぐらいの少年だった。

少年は豪華な青い服を纏っていて、笑顔を浮かべてローゼリアに話しかける。

「いやあ、パーティが長引いちゃってね。待たせてごめんね？」

男の顔がみるみる青ざめていく。

ローゼリアはわけが分からず、目をぱちくりさせた。

「俺の連れに御用かな？」
「お、皇子の知り合いだったんですか……。すみません！」
男は慌てて逃げて行ってしまう。
「無事かい？」
「は、はい。あなたは……」
「俺は、セージル。皇子様とでも呼んでくれ」
ポカンとするローゼリアに対してセージルは苦笑いして「皇子なのはホントだからね」とつけ加えた。
「一人で帰れるかい？　無理なら、馬車代くらい出すけど」
「い、いえ、お金はいいです。今日の宿を用意してほしかったりですね……」
「ごめんね、俺はもう帰らなきゃならないんだ」
にっこりと笑顔で告げられた。
流石に宿を用意してほしいは言い過ぎたと思い「大丈夫ですよ」と言っておいた。
「じゃあ、馬車代はいらないのかい？　宿代でもあげるけど……」
「いいです」
「そうかい、じゃあね」
セージルが歩き出してしまうとローゼリアはシュンとした。
〈あんなかっこいい人と仲良くなれたら……〉
セージルは足を止め、少し迷ったが引き返した。

再びローゼリアの元まで行き、彼女の手を引いた。
ローゼリアは目を白黒させた。
セージルは満面の笑顔を浮かべ、

「行こうか、お姫様」
「え？　でも、帰らなきゃいけないのでは？」
「なに、俺の家は部屋なんて腐るほどあるから君の宿にすることは可能だよ。その代わり、君の国について教えてくれるかな」

ローゼリアは笑顔で頷いた。
「はい！」

◆

「なるほど」

確かに物語みたいな出会い方である。
絡まれていたところを助けられてなどまさに王道展開である。
ローゼリアはその時から既にセージルのことを好きになっていたのだろう。

「でも、余計に何とかしてあげたいな」
「ん、そうだな。ローゼリアを可哀想な嫁にするのは気が引けるか

らな」

夫のことをずっと想い続けているのに、その反面夫は浮気をしまくるなどというのは流石にローゼリアが可哀想だと思った。
少なくとも、二人が結婚するまでに何とかした方がいいと考えた。
しかし、問題はローゼリアではなくセージルだった。
どうやって浮気癖を治せばいいのか。

シーゼンの話では、セージルの女好きはローゼリアに出会う前からのようであるし、治すのは容易ではないだろう。
チャウランは腕を組んで椅子にもたれかかった。

「どうすればいいかな……」
「まあ、それは――」

シーゼンは言葉を区切ってお茶をずずっとすすり、再び口を開く。

「ローゼリアは他の女とは比べ物にならないほどの魅力があると気づかせるほかないだろう」
「だ、だよね」
「ともかく努力してみろ」
「りょ、了解！」

チャウランは敬礼のポーズを取った。

野菜が九個

チャウランは部屋から出て廊下を歩いていた。
床に敷かれた赤い絨毯は相変わらず、朝のまだ目が眠い時に見るのは辛かった。
とりあえず廊下を歩き回って人の姿を探した。
キョロキョロと周囲を見回していると背後から声をかけられる。

「チャウラン、どうしたの？」

聞き覚えのある声に振り向くとそこに立っていたのはほうきを持ったエストだった。
エストは相変わらず無表情でじっとチャウランを見ながらほうきを動かして廊下のほこりを集めていた。
チャウランは笑顔を浮かべて挨拶する。

「おはよう」
「おはよう」
「エストちゃんはローゼリアがどこにいるか知ってる？」
「むー、ローゼリアならこの時間はバラ庭園にいるはずなの」
「バラ庭園……」

どうやらローゼリアは毎日花の世話をしているらしい。
エストの話ではもともと、バラ庭園のバラはローゼリアの国のものでローゼリアの父がこの王宮に送ったものらしい。
チャウランはバラ庭園に向かうことにした。

◆

王宮の裏口から外へ出ると、中庭とはべつに大きな敷地がありそこには赤いバラの花が一面に咲き誇っていた。
よく手入れされているようでバラには汚れも一切なくきれいに並んでいた。
ブルーの空に浮かぶ明るく情熱的な太陽の光を浴びたバラは輝いて見えた。
そんななか、ローゼリアはバラにジョーロで水を撒いていた。
小さなジョーロからシャワーのように出てきた水はバラと土を濡らしていく。
じっとその様子を眺めているとローゼリアがこちらに気づいて駆け寄って来る。
彼女はにっこりと笑顔を浮かべる。

「こんにちは、チャウラン。一体どうしたんですか？」
「えーと……」

何て言えばいいのか分からない。
ローゼリアはセージルが浮気してることなど知らないのだから、彼の浮気癖を一緒に治そうと言うわけにはいかない。
なら、どう言えばいいのだろうか。
チャウランは腕を組んでしばらく考え込んだ。
そんなチャウランを不思議に思ったのか、ローゼリアは心配そうにチャウランの顔を覗き込む。

「大丈夫ですか？　何か悩みでも……」
「え？　い、いや、私は悩みなんかないから」

言いながら慌てて首を振った。
それでもまだ心配そうにしているローゼリアを見て、チャウランはよく考えもせず、咄嗟に言ってしまった。

「そ、そうだ！　皆で出かけようよ」
「へ？」

ローゼリアは目を丸くしてチャウランを見た。
不思議そうに首を傾げて、

「でも、外へ出られるんですか？」
「んと……」

チャウランは笑顔を浮かべて、

「シーゼンに頼んだら、何とかなるよ」
「そうなんですか？」

とりあえず、王宮から出てどこかに連れ出すのもいいとも思った。
セージルとローゼリアが一緒に出かければ仲が深まる可能性もあるだろうし。
問題はどこに行くかだった。
どういう所に行けば効果的なのか分からない。
それと、できれば二人で出かけてもらった方がいいのだが、セージルがローゼリアと出かけることを拒んでいたのと、既に皆で出かけようと言ってしまったこともあり、ついて行くしかない。

〈どこに行くかはシーゼンに相談してみよう〉

「そう言えば、ローゼリアはこの国に来てから楽しい？」

そんな質問を浴びせるとローゼリアはしばらくキョトンとしていたが、やがて満面の笑顔を浮かべて頷いた。

「もちろんです。皆さん、良い方ですし風景もきれいでセージル様もお優しいので」

「……」

セージルが優しいの事実だろう。

愛想が良くて誰にでも優しくできるのはセージルの人柄だとシーゼンは言っていた。

性格も良いだろうし、問題なのは女好きのところだけである。

それさえ治れば完璧だと思うのだが。

「じゃあ、私はシーゼンに頼みに行ってくる」

「そうですか。楽しみにしてますね！」

チャウランは手を振ると踵を返して、入り口へ向かった。

入り口から王宮内に足を踏み入れた。

目の前に広がる長い廊下を見てため息を吐いた。

「部屋に戻るまでが遠いな……」

呟きながら歩き始めた。

そうしていると前方からセージルが歩いて来た。

「あ、セージルさん」

「チャウランじゃないか。おはよう」
「おはよう……」
チャウランは警戒して少し距離を置いた。
「どうしたの？」
「あんまり話してるとシーゼンに怒られるから……」
「なるほど。まあ、俺も兄さんに嫌われたら困るかな」
「あ、そう言えば、皆で出かけたいと思うんだけど、セージルさんも」
「もちろんいいよ。どこ行くの？」
「それは、これからシーゼンに相談するから」
「そっか。じゃあ、どこ行くか決まったら声かけてね」

セージルは軽く手を振ると、そのまま歩いて行った。
振り向くと彼は先程チャウランが入って来た入り口から外に出た。
チャウランは気になって一旦引き返して、入り口からこっそり外の様子を覗いてみた。
ジョーロで水を撒くローゼリアとセージルが楽しそうに会話をしていた。
流石に関係が冷え切っているということはなさそうである。
その様子を見て少しだけほっとした。

◆

部屋に戻って出かけることを話すと、額を叩かれてチャウランはうずくまる。
シーゼンは呆れ顔で呟く。
「よく考えてから発言しろ」
「でも、もう言っちゃったし……」
「仕方ないな……」
「どこがいいかな？　やっぱり町？」
「いや、町はやめておいた方いいな」
シーゼンがそう答えるとチャウランは首を傾げた。
「町はセージルの浮気現場だからな。セージルと仲のいい女が声をかけてきたらどうするつもりだ」
「あ」
確かにその通りだった。
町に行ってローゼリアのいる所でセージルの浮気相手なんかが声をかけてきたりしたらまずいことになる。
「じゃ、じゃあ、海で！」
「泳ぎもしないのにか」
「ロマンチックだから」
「二人きりじゃない時点でロマンチックとは言えないがな」
「うぐ……」
チャウランは口を噤んだ。
むすっとして、シーゼンを見つめていると頭をポンと叩かれた。

「そう怒るな。ちゃんと協力はする」
シーゼンは苦笑いを浮かべて、一言。
「ただ、セージルとローゼリアは海よりも森や山の方が好きらしいな。どうする？」
それ聞いてチャウランは驚いたような表情を浮かべて、やがて頷いて口を開く。
「じゃあ、森で！」
「分かった。じゃあ、父上に話を通してくるからここで待ってるといい」
「うん」
チャウランは椅子に腰掛け、シーゼンが戻って来るまで待つことにした。
窓に視線を映してブルーの空を眺めながら考える。
〈でも、森って何ができるんだろう？　木の実の採集？〉

野菜が十個

とりあえず森に行っても楽しめるようにとリイゼンに作ってもらった弁当を詰め込んだバスケットを持ち、入り口でセージルとローゼリアが来るのを待っていた。
シーゼンは立っているのが疲れるのか、入り口の脇にある長椅子に腰掛けていた。
腕を組んで目を閉じているからチャウランは寝ているのではないだろうかと心配になった。
べつに寝ているなら、起こせばいいのだが機嫌を悪くしないかなどと考えていた。
どうしようかと考えているとローゼリアとセージルが姿を現した。
ローゼリアは不思議そうに首を傾げた。

「あれ？　どうかしたんですか？」
「うん、シーゼンが寝てる」

それを聞いてセージルは苦笑いして肩を竦めた。

「兄さんはどこででも寝られるからね」

ある意味すごいと思った。
ここは、入り口のすぐ傍であるし、チャウランは自分なら人目につくのが恥ずかしくて寝られないと思う。
とりあえず二人が来たのでシーゼンを起こす必要がある。
流石に置いて行ったりしたら怒りを買うだけだろう。

「シーゼン」

身体をゆすってみる。
しかし、起きる気配がないので頭を叩いてみた。
するとシーゼンは目を覚まし、不機嫌そうにこちらを見た。
「もう行くんだけど……」
「……そうか」
彼は渋々立ち上がった。

◆

町外れにある森を訪れていた。
青と白のグラデーションを繰り広げる鮮やかな空の下、うっそうと生い茂る木々が日光を遮ってきて、森は少し薄暗かった。
地面には数え切れないほど草が生えていて、小さな花も咲いていた。
風でさわさわと揺れる葉の音が聞いていて心地よかった。
「それにしても、森っていいですわね。随分王宮から出ていなかったので新鮮です」
「そうなんだ？」

ローゼリアも王宮から出ることは滅多にないらしい。
やはり婚約者だとか皇族に関係ができるとあまり自由に外出することもできないのだろう。
外に出て何か危険な目に合う可能性も高いわけであるし。
チャウランは、シーゼンとセージルを交互に見て首を傾げた。

「そう言えば、皇子なんかが外に出るのに護衛とかついてなくて大丈夫なの？」
「案ずるな。俺もセージルも、もしもの時のために護身術は習っているからな」
「な、なるほど……！」

彼らの実力がどれほどのものなのかは分からないが、護衛をつける必要がないほどではあるのだろう。
確かに護身術を身をつけていれば、出かける際もぞろぞろ兵士に囲まれて窮屈な思いをする必要もない。
よくよく考えれば、セージルはいつも町に一人で出かけられるのはそのおかげだったのだ。

「……」

もしかして、セージルが護身術を身につけていなくて出かける際は護衛を連れていかなければならなかったなら、浮気はしなかったのではないかと考えた。
しかし、護身術の有無だけで決まることに真実味はなくその考えはすぐに振り払った。
そうしていると、ローゼリアがしゃがみ込んだ。
チャウランは慌ててローゼリアに声をかけた。
「どうかしたのかな？　もしかして、具合が悪いとか」

「この花、きれいなので持って帰ります！」
「花ですか！」
ローゼリアは地面に生えていた小さな花を指差して目をキラキラさせていた。
「花なんか持って帰ってどうするの？」
チャウランはじっとローゼリアを見ながら尋ねた。
「もちろん、花壇に植えます」
「なるほど。けど、どうやって？　すぐ枯れちゃうんじゃ」
「ちぎるんじゃなく、根元から掘り起こせば大丈夫だよ。てか、チャウランも農民さんなんだから、それぐらい知らない？」
「し、知ってた！」
セージルに言われてチャウランはむすっとした。
野菜を育てるのは得意でも、花のことは知らないとかそういうわけではない。
ローゼリアが既に用意してきていたらしいスコップで花を根元から掘り起こしてバッグに詰めていた。
どうやらローゼリアとセージルは、採集目的で森に来るものらしい。
チャウランも何かないかと思ったが、流石に森に野菜は見つからない。
「しかし、セージルとローゼリアはバカだな」
「え？」
「わざわざ苦労して森に来なくても店で買えばいいだろうに」
「……」

シーゼンの言葉でその場に沈黙が流れた。
風が葉や草を揺らす音だけが耳に届く。
「な、何でもお金を使えばいいわけではないんですよ？」
ぷるぷる震えながらローゼリアは呟く。
「まあ、そのね、森には店にはない花なんかがあるからさ」
「そうか」
「そうですとも」
何か空気が悪くなった気がする。
森で採集するのが好きなセージルとローゼリアに店で買えばいいと言う言葉は地雷だったらしい。
「しかし、わざわざ服を汚してまで集めなくとも兵士にでもやらせておけば――むぐ」
チャウランは慌ててシーゼンの口を塞いだ。
汚れてなどと言う言葉はさらに空気を悪くするだけの気がしたからだ。
「部屋でゴロゴロしてるだけの兄さんには分からないんだよ」
「私、汚れてなんか……」
「そ、そうだ！　そろそろお腹すいたよね！？　お昼にしよう」
チャウランはバスケットを見せて笑顔でそう言った。
果たしてこんなもので、ローゼリアとセージルの仲は深まるのだろうか。

むしろシーゼンと二人の仲を悪くすることは簡単にできてしまいそうだが。

バスケットを地面に置くと、なかから大きな布を取り出して地面に敷く。

布が飛ばされないように石で固定すると次は弁当を布の上に並べた。

弁当はリイゼンに作ってもらったもので、大きな箱に様々な料理が詰められており、海苔を巻いたおにぎりを人数分。

「外でお弁当というのもいいですよね？」

笑顔でローゼリアが告げる。

チャウランも頷く。

何とか持ち直すことができそうだと思いながらおにぎりを口に含む。

「それにしても、チャウランは何で急に出かけようなんて言い出したのかな？」

お茶をすすりながら尋ねてくるセージルに対してチャウランは口を噤んだ。

適当な理由を考えて口を開いた。

「ちょっと皆で遊びたくなったんだ。気分転換に」

「そうなんだ？　まあ、ずっと王宮のなかにいたら外に出たくもなるよね」

こくこくと頷いた。

そうしながら、早くセージルに確かめなければとチャウランは思

った。
ローゼリアのことをどう思っているのか。

◆

昼食を終え、バラバラになって採集を行っていた。
ローゼリアは相変わらず花を掘り起こしていて、シーゼンは木にもたれかかって昼寝をしていた。
チャウランは少し奥へ進み、スコップでキノコを掘り起こしているセージルの隣にしゃがみ込んだ。

「どうしたの？」
「話があるんだけど、いいかな？」
「どうぞ」

野菜が十一個

チャウランはセージルの隣できのこを掘りながら口を開いた。

「ローゼリアのことはどう思ってるのかな」

その問いに対して彼は笑顔で答える。

「もちろん好きだよ」

特に迷った様子も見られず、嘘をついているようにも見えない。
本来ならこれで安心できるところなのだが、そうもいかない。
セージルがローゼリアのことを好きなのは事実だろう。
でなければ、婚約などしなかったはずだ。
問題は浮気。
チャウランは迷ったが、聞かなければどうにもならないのでセージルの姿をじっと見据えて尋ねた。

「じゃあ、何で浮気するんですか？」

「それか」

セージルは苦笑いを浮かべた。
どうあっても、浮気をやめてもらわなければならない。
そうしないと、ローゼリアが可哀想だから。
セージルはスコップでキノコを掘って、持って来ていた籠に放り込みながら何か考えるような素振りを見せた。

「浮気か……。確かにその通りだよ。俺は――」

彼が言葉を続けようとした時、何かが落ちる音が後ろから聞こえた。
振り向くとそこに立っていたのは、驚いたような表情を浮かべたローゼリアだった。
その足元には落としたらしい花が詰められた箱が落ちていて、なかに入っていた花は地面に散らばっていた。

「浮気……？」
「ろ、ローゼリア……」

チャウランはどうにかしようと思ったが、何を言えばいいのか分からなかった。
ローゼリアは肩を震わせ、泣きそうな表情でセージルを見た後、散らばった花を集めて籠のなかに詰めなおすとそれを持ち上げ、チャウランに笑いかけた。

「……私、もう少し奥まで探しに行ってみます」

そう言い残し、ローゼリアは背を向けると走り出した。
チャウランは慌てて止めようと大声で彼女を呼ぶ。

「ローゼリア！」

しかし、彼女はそれに答えることなくそのまま去ってしまった。
チャウランはその場に立ち尽くしたままセージルに視線を移した。
そして尋ねる。

「セージルさんは何で浮気を……」
「何ていうか、思うようにいかなかったらかな」

彼はポツリと呟いた。
その表情は少しだけ寂しそうだった。
セージルは腕を組んで話を続ける。

「まあ、女の子が好きだったのは事実なんだけどさ、ローゼリアと婚約したところまでは良かったんだ」
「え？」

婚約した後に何か不都合でもあったのだろうか？
ローゼリアのことを好きではあるが、どこか気に入らないところがあるということなのではないかとチャウランは心配した。
しかし、何も言わずに地面に座ったまま耳を傾けた。

「愛情表現の仕方が分からないっていうかね」
「へ？　すごい分かってそうなイメージだったんだけど……」

セージルは苦笑して肩を竦める。

「ローゼリアは他の女の子とは違うんだよ。何せ、婚約者だからね。他の女の子と同じような扱いをするわけにもいかない。でも、いざとなるとどうすればいいのか分からない」
「愛情表現……」

確かシーゼンも言っていたような気がする。

「単純にキスすればいいわけでもないし、考えても結局分からなかった。だから、逃げたのかな」
「愛情……」

セージルもローゼリアのことを強く想ってはいるんだろう。

しかし、愛情表現の方法が分からないとは。
チャウランは口を噤んだ。
自分は恋愛の達人というわけでもなく、むしろ右も左も分からないぐらいだ。
それで何か効果的なアドバイスをすることなどできそうにもない。
ふと、背後で足音が聞こえた。
ローゼリアかと思ったが、シーゼンだった。

「そんなものは、単純にキスして愛してるとでも言っておけばいいんじゃないのか？　変に回りくどいやり方をするより、ストレートなやり方の方が伝わるとは思うが」
「そうかい？　はっきり言って王宮に戻ったら濡れ場展開した方がいいのかい？」
「とりあえず黙るんだ変態。そもそも、そういう子作りは正式に結婚してからというのが常識であってな、あと十八歳未満がそういうことをするのはダメだからな。話題のあの官能小説も十八禁とよく言われているだろう？」
「……そういうの読んでるとか公言しちゃダメなんじゃ！？」

チャウランが突っ込んだがシーゼンは特に表情を変えることなく告げる。

「何も読んでいるとは言ってないのだが？」
「……」
「子作りはダメなんだね。まあ、俺もまだ経験ないしちゃんと勉強しとかないと。だから兄さん、今度その官能小説貸してね」
「分かった」
「結局読んでるんだね！？」

〈女の子の前でこの手の会話はやめてください。てか、二人とも皇

子だよね？　一国の皇子が官能小説だとか十八禁だとか外で平然と言ってるのは……〉

国民に知られたら評判がガタ落ちするのは間違いないだろう。

チャウランは二人の背中を押した。

「早くローゼリアを探そう」

「そうだね、ストレートでいいんだね？」

「うむ」

◆

森の奥に進んで行くにつれ、木々の数は増えていきついには空が一切見えなくなり暗くなって行った。

冷たい風が頬を撫で、チャウランはぶるっと震えた。

絶対に一人でここには来られないと思いながら歩き続けた。

足場も悪く、油断するとつまずいてしまいそうだった。

しばらく進むと、洞窟が見えた。

その洞窟のなかへと足を踏み入れると冷たい空気が漂っていた。

そこにはローゼリアが座り込んでいた。

後ろを向いているせいで表情を伺うことはできない。

「ローゼリア」

声をかけたのはセージルだった。

「帰ろう」

「嫌です。帰りません」

「帰らなくてどうするんだい？」

「私はここで野垂れ死にます！」

ローゼリアの声が響いた。

その声は震えていて、泣いていることが分かった。

「ローゼリア」

彼は再度呼びかけ、ローゼリアの隣にしゃがみ込んだ。

両手でローゼリアの顔を自分の方へ向かせると頬に口づけをした。

「愛してる」

一言だけだった。

ローゼリアはしばらくポカンとしていた。

「帰ろう」

そしてその言葉にこくりと頷いた。

ローゼリアは立ち上がり、ポロポロと涙を流し始めた。

「うう……もう浮気なんかしないでくださいね……」

「もちろんだよ」

「……」

チャウランはじっとその様子を眺めていた。
流石のこの状況では声をかけづらい。
しかし、二人の様子を見て心底安心した。
これなら、もう問題は起こらないだろうと思った。

「愛情……。す、すごい。二人とも仲良さそうだな」

チャウランは関心した様子で呟いた。
その様子を見てシーゼンはむすっとした表情を浮かべてチャウランは見た。

「それはつまり、俺の愛情表現は足りないということか？」
「え？　い、いや……そんなことは」
「まあ、安心しろ」
「ん？　そうだね」

よく分からないが頷いておく。
シーゼンはにっこりと笑った。

「俺は、官能小説を読んで知識は蓄えてあるからな」
「……っ！？　わ、私はまだ十六歳で愛情なら足りてます！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6950z/

王宮で農業生活を送る花嫁

2011年12月31日20時23分発行